

2016年4月22日

都道府県高等学校野球連盟  
審判委員の皆様へ

日本高等学校野球連盟  
審判規則委員会

「甲子園から全国へ・・・2016年春」

## 第88回選抜高等学校野球大会を終えて

2013年のアマチュア野球内規で既に規定されている、「本塁での衝突プレイ」に関する規則が新たに公認野球規則（2016年）に制定され、走者の無闇な“体当たり”や捕手の“ブロック”に規制がかかり、野球シーズン到来前にテレビや新聞紙上でも話題になり、改めて意を決して臨んだ大会でありました。残念ながら、大会初日に捕手の本塁上での走塁妨害適用事例が発生したものの、以後は選手諸君のフェアプレイの精神と澁刺とした動きで、平均試合時間は1時間56分とテポある大会となりました。一方で、本塁を中心に、様々なプレイに課題が残る大会でもありましたので、その幾つかを振り返ってみました。

### 1. 打者が捕手の送球を妨害する。

2塁への盗塁時に、三振でアウトになった打者が捕手の送球を妨害する行為がありました。守備の対象である1塁走者にもアウトを宣告し、場内放送も行いました。守備妨害を適用することは勿論のことですが、この状況で最も大切なことは、同じ事象を二度と発生させないための指導です。球審は、アウトになりベンチ付近まで戻っていた打者を打者席まで呼び戻し、正対して指導を行いました。当該打者を含め、両チームの選手、また試合を球場やテレビで観戦している野球関係者には妨害行為を行わせないという強い信念での指導方法であったと思います。

### 2. 打者が投球に当たりにいく。

打者がエロガード等の保護具を装着することが当たり前の状況となっています。高校野球ですので、十分な安全が確保された中で試合が運営されることは大変重要なことです。保護具着用は、正にこの趣旨から着用が許可されていますので、その安全性を逆手にとって、投球に当たりに行くということは絶対に行ってはならない行為です。また、エロガードのゴムバンド取り付け方も気になりました。しっかりと本体に巻き込まれず、ゴムバンドの一部が垂れ下がった状態で打撃姿勢をとる打者も散見されました。球審が注視すれば、指導可能な事項です。

### 3. ボールの管理。

プロ野球ではリバウンドした投球を捕手がボール交換を要求するケースを多々見かけます。今大会でも時々見かけました。球審は要求があったからといって即交換するのではなく、状況をよく確認することが不可欠です。甲子園大会は、スタンドに飛び込んだボールは観客が持ち帰ることができますので、一定数のボールが準備されています。しかしながら、校内グラウンドでの練習試合は両校が提供する計6個の限られたボールで試合を進めることが多く、使用可能か否かを常に球審は確認しておく必要があります。球場で観戦された審判委員の方から、「ボール交換の基準はあるのですか？」と質問を受けました。例えば、野手からの送球が悪送球となりバックネットに直撃した場合や、打球が外野フェンスに直撃した場合、ボールに傷が入っていたり、変形していたりすることがあります。ボールが継続使用可能か否かを確認して使用不可であれば、ボールボーイに使用不可であることを伝えてゲームを進めて行くことも必要なことでもあります。

昨春の「甲子園から全国へ・・・2015春」では、「『球際』に強くなろう」と呼びかけました。これは勿論のこと、今大会を振り返り、「指導力・観察力にも一層の磨きをかけ、グラウンドティチャーとしての自覚を持つ」ことを共通の課題として、共に研鑽して参りましょう。

以上